

---

**コンなことが起きるなんて、ピンぼうくじかもしれないけれど、二度とない人生な訳で。**

玖波野 コウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コナなことが起きるなんて、ピンぼうくじかもしれないけれど、二度とない人生な訳で。

### 【Nコード】

N4742R

### 【作者名】

玖波野 コウ

### 【あらすじ】

コンビニエンスストアを舞台に、幸か不幸か物語の主人公になってしまった男子高校生。どこにでも居る普通な少年と、彼をとりまく人、人、人。笑いあり、涙あり、恋愛あり。えっ、ハレンチな展開も…！？予定は未定で決定に非ず。楽しければいいじゃない。だってそれが人生だもの。そこまで激しい内容にならないかと思いますが、舞台が舞台ですので犯罪も取り扱つかもしれません。念のためR-15措置です。そんなに構えなくても大丈夫です。期待

してる方、申し訳ございません。

どんな場合においても、ルールは守らねばなりません。(前書き)

この物語はフィクションであり登場人物・団体名等は全て架空のものです。

どんな場合においても、ルールは守らねばなりません。

例えば、堪らなく尿意を感じていたときに目の前にコンビニエンスストアがあつたとする。そしたら、迷わず足はそちらに向かうだろうし、トイレを借りるだろう。

ドアの前に立てば自動的に開くものでないのが、若干まどろっこしく感じるかもしれない。ここは手で押したり、引いたりするタイプの出入り口だった。

ドアを押して入り、店の奥に進んでいくとトイレのマークがついたドアがある。大概は男女兼用だ。そして、目の高さより少し下の位置に大きめのシールが貼つてある。

『お手洗いをご利用のお客様は、必ず店員にお声を掛けてからご利用下さい。』

本来なら、このルールに従うべきなのである。レジにいるユニフォームを着た可愛い女の子に、「トイレをお借りします。」とたったそれだけの言葉を口にして伝えれば良いだけの話だ。

だが、それを怠る人間は少なくない。恐らく、別に咎められる訳でもないからだろう。手間を省きたいのか、尿意との戦いを一刻も早く決着を着けたいのかは人それぞれだが。

例に漏れず、僕も声を掛けることなくドアノブに手を伸ばし握ると軽く回しそのまま押した。

電気は点いていない。そこは、手洗い場であった。鏡も付いているようだ。

電気よりも用を足すことを優先した僕は、目の前のもう一つのドアを開けるべく一歩踏み出した。

だが、それ以上進むことは叶わなかった。中に人が居たから、ではない。

そこにあるべき床はなく、底が開いていたのだ。

気付いたときには既に遅く、バランスを崩していた僕は暗闇の中に落ちていく。

驚くと咄嗟に声が出ないというのはどうやら本当らしい。

十七年の生涯は、尿意を抱いたままで幕を閉じるのか。格好悪い。実に格好悪い。死ぬのならば、いつそのこと漏らしてスッキリ感を味わって死ぬのも悪くないかもしれない。

そんな下らないことを考えられるくらいに、落ちている時間は長く感じられた。実際は一瞬だったのかもしれない。

尻に、軽い衝撃。痛みをそんなに感じないのは、まるで誰かが落ちてくるのを想定しているかのように下に引いてある厚いマットのようなもののお陰かもしれない。身体は半分ほど埋まっている。

助かった。となると、やはり漏らさなくて正解だったかもしれない。いやいやいや、そうではなくて。

「なんだア？普通、穴から落ちてくんのは不思議の国のアリスばりの美少女だよな。」

僕が聞いても色っぽいと感じるような心地よいテノールに顔を上げると、このコンビニの制服を肩に羽織り腕を組みながら回転椅子に座った男が訝しげな表情を浮かべてこちらを見ていた。

「そもそも、君はどちら様だい。」

「あ…。」

「まア、いいや。本当は女の子が良かったけど。」

「すいませ…」

「空いてる枠一個しかないし、早く埋めたかったし。あつ、文句言ったら目潰しだから覚悟ね。」

僕が落ちてきたことを大して驚く訳でもなく、背凭れに身体を預け顎に手を当てながらぶつぶつと独り言を呟いて、物騒なことを言いつつニヒヒと笑いながら、顎に当てていた手を離し目潰しするよ  
うな動作を入れた。

状況を説明してくれる訳でもなく、落ちてきた僕の身体を労わるでもなく、そもそもこれは店舗側の不注意で落ちた筈なのに、それについてのフォローも謝罪もない。何か話を一方的に進めているような節さえある。

ましてや、本来このコンビニに入った目的でもあるトイレにさえ行けていない。

「人の話、聞けよ！」

つい、大きめの声が出てしまいハツとして男の方を見ると彼は立ち上がった。痩身気味に思えたが、僕がマットに未だ身体が埋まっているのも手伝ってか、妙な威圧感を感じた。

男は、机の上に乗る店頭でも見たことのある地球儀に似た棒付きキャンディーの刺さるディスプレイから牛柄の包装がされたものを引っこ抜いた。

「カルシウム足りてないなア、最近の若者は。自分のこと棚に上げて、随分と偉そうな口利いてくれんじゃねエか。」

包装紙を外しポケットに突っ込んで、棒付きキャンディーを口に含むとバリバリと音を立てて噛み砕いた。

「うちは無名なコンビニだからかなア…最近駅前に大手さんが出来ちゃったし。ちよつと立地条件の問題もあるみたいだけど、馴染みの客ばっかなんだよ。君はどう考えても初めて見る奴だし。」

どこか困ったような表情を浮かべながら、棒を啜えたままで腰に手を当てて右足に体重を乗せてお構いなしに喋り続ける。

「つまりはトイレの注意書き、読んでないってことだねエ？」

「ウルセエな！レジに客が並んでたんだから仕方ねエだろ！」

「それでも、君の過失だろ。張り紙に『必ず』って入ってた筈だ。」

キャンデーの棒をプツとゴミ箱に向けて吐き出し、黒い髪をくしゃりと掻いた後で犬歯を覗かせ笑って見せた。

「君がトイレを黙って使おうとさえしなければ、全て丸く収まっていた筈だ。違うかい？もしかしたら被害者のつもりかもしれないが、それはお門違いだ。郷に入っては郷に従えというだろう。『必ず』と書いてあった。それを君は見落とした。ここでのルールを破ってしまった。つまり、被害を受けたのは君ではない。紛れも無く貴重な休憩時間を邪魔されてしまった僕の方だ！」

一方的に捲くし立てられると相手の言っていることがあながち外れてもいない気がしてしまい、ぐうの音も出ない。それでも、僕の気持ちとしてはモヤモヤして、ハラハラして、仕方がない。

「でも、僕も鬼じゃあない。その制服、琥珀高だね。僕も卒業生としては、可愛い可愛い後輩に情けを掛けてやらないこともない。」

今まで浮かべていた表情が、接客用の笑顔であったことを知った。僕は思わず息を飲んで、言葉の続きを待つ。

彼は真顔になると、人差し指を僕に向けてすぐには理解出来ないようなことを口にした。



「君、今日からペンクね。」

どんな場合においても、ルールは守らねばなりません。（後書き）

誤字・脱字等発見された場合はご報告をして頂けましたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4742r/>

---

こんなことが起きるなんて、ビンぼうくじかもしれないけれど、二度とない人

2011年10月8日20時43分発行